

広告特集 企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局 協力 株式会社ワタナベエンターテインメント

林修 × 朝日新聞

よくわかる 林修の特別授業

農業は進化し続ける



無人のキャベツ収穫機。カメラの画像をAIが判断しながら実を傷つけずにカットする。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs (Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)とは

世界が抱える問題を解決し、持続可能な社会をつくるために世界各国が合意した17の目標と169のターゲットのこと。2015年、SDGsの前身であるMDGs(ミレニアム開発目標)を継承し、国連で採択された。

■今回取り上げる社会課題は



今から10年、20年後。日本の農業は大きく様変わりしているかもしれません。ロボットやAIの進化が働き手不足解決の一助となり、農家は潤い地域はにぎわいを取り戻す。各地で始まっている新たな取り組みから、そうした明るい未来図が見えてきそうです。林修編集長と望月まりなりリポーターが、農業の今とこれからをお伝えします。



今回のテーマ
労働力確保への対応と新しい技術
林修の特別授業 協同組合 第15回

望月 編集長 今回私は北海道の鹿追町で、露地野菜の自動収穫・運搬の実証実験取材してきました。この町では主要産品のひとつであるキャベツの出荷額が、一時期大きく減っていたそうです。高齢化などで離農する人がいると、その土地を受け継いだ周辺の農家は経営面積が広がる半面、収穫作業に必要な労働力を十分確保できなかつたからです。

林 なるほど。複雑で手間のかかる農業をロボットなどに置き換える取り組みは海外でも進んでいますからね。今回取材したのは、そんな状況に対応する技術なんです。

望月 そうです。自動収穫機でキャベツを収穫し、コンテナが自動的に運ばれたら自動運搬車で運び、無人フォークリフトでトラックに積み込む。大学やJA、メーカーなどが主体となり、研究開発をしてきて技術的にはもうそこまで可能になっています。現在の収穫機でもキャベツの切り取りは自動化されていますが、収穫機の操作や選果、運搬は人力に頼っています。この新しい技術は、収穫作業にかかる人手を半減することをめざしているそうです。

林 収穫したキャベツを金属のコンテナに入れるというの珍しいですね。

望月 少しでもコストを削減するためダンボールの使用をやめたんだそうです。鹿追町で生産されるキャベツは加工用が

無人化・省力化を進めながら生産規模の拡大やコスト削減をめざす取り組みです。

主で中食・外食に使用されており、受け入れるキャベツ加工工場などの側には、従来のやり方を変えることに戸惑いもあったようですが、しっかりと話し合っ理解を深め、今ではとても良い関係を築いていると聞きました。



畑が広いほど機械の作業効率は上げられる。

最小の労働力で最大の生産を

露地野菜の自動収穫技術の実用化 JA鹿追町

農業を元気にする
新たなテクノロジーや
地域の特色を生かした
取り組みを取材せよ。

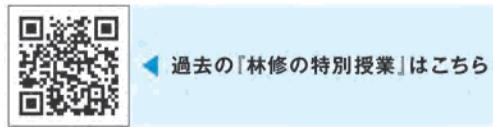
編集長
東進ハイスクール 講師
林修先生

はやしおさむ / 東京大学法学部卒業。東進のTVコマシャルのセリフ「いつやるか?今でしょ!」が2013年新語・流行語年間で大賞に。受験生から絶大な信頼を得る傍ら、多数のTVレギュラーを抱え多忙な日々を送る。



リポーター
望月まりなさん

もちつき・まりな / 2002年9月22日生まれ。滋賀県出身。7歳からダンスを始め、国内の大会だけでなく、海外の大会でも多くの優勝経験がある。ダンスと学業との両立を目指す女子高校生ダンサー。現在は朝日新聞大学入試キャンペーンイメージキャラクターを務める。



過去の「林修の特別授業」はこちら

■今回はこれからの農業経営をテーマに2020年1月下旬に掲載予定です。

労働力の確保や栽培技術の継承に向けて 農業の現場で進む取り組みがあります。



料理コンテスト優勝のセルリーまぜごはん



地元で有名なシェフ考案の山形セルリーラーメン

JAがハウスの整備や最新技術の導入を進め、就農促進と伝統の継承に役立っています。

望月 ところで編集長は「山形セルリー」について存じですか?
林 セルリーはセロリですね。山形が産地というのは知りませんでした。

望月 「山形セルリー」には50年の歴史がありますが、セルリーは非常にデリケートで栽培に手間がかかるため、担い手不足が進み数年前まで生産額はほとんど減少していました。このままでは栽培技術が途絶えてしまうと、地元には強い危機感があつたそうです。

林 それを取材したということは、現在は状況が変わってきたんですね。

望月 そうです。JA山形市では、5年前に「農業みらい基地創生プロジェクト」がスタートしました。これまでセルリー栽培の経験がない人にも始めやすいよう、JAがハウス整備などを進めて人を募ったところ、既存農家だけでなく農業未経験の

林 GI取得のためにはベテランの知識や経験を「見える化」して文書などに残す必要がありますからね。貴重な伝統をしっかりと未来に伝えてほしいものです。



現在は生産者の3分の1が40代以下。若々しいロゴやデザインも好評だ。GI登録証

産地をあげて伝統を未来へ

山形セルリーの栽培技術の継承 JA山形市

人からも応募がありました。今ではセルリー生産者の平均年齢はぐっと若返ったといえます。

林 それは嬉しいですが、栽培技術の継承はうまくいっているんですか?

望月 ハウスには温度や湿度を計測するセンサーがあり、生産者はモバイル機器ですぐ内部の状況を確認できます。この仕組みのおかげで、若い生産者はベテランが温度や湿度を細かく調整するやり方を見て学ぶこともできるんです。また山形セルリーは地理的表示(GI)や地域団体商標の認証を取得し、ホームページではユニークなメニューの提案もたくさんしています。PRにもぜひ力をいれたいですね。



耕そう、大地と地域の未来。JAグループ